

平成
30
年度

八 泉 八 雲 を よ む

感想文・詩
入賞作品集

松江市
松江市教育委員会
八雲会



文豪小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）は、松江での一年三ヶ月にわたる暮らしのなかで、当時失われつつあった古き良き日本の面影を見出し、美しい文章に載せて全世界に紹介しました。松江市では、現在の「国際文化観光都市・松江」の礎を築いた小泉八雲の顕彰を目的とする様々な事業を行っています。

この一環として、昭和六十一年から毎年行っている「小泉八雲をよむ」感想文・詩の募集事業も今年で三十三回目となりました。今回は、感想文六十五編、詩二十九編、合計九十四編の力作をお寄せいただきました。

この作品集では、応募作品のうち優秀賞及び優良賞を受賞した十編の作品を掲載しています。ぜひ多くの皆様にこの作品集をご覧いただき、小泉八雲を身近に感じる契機としていただきたいと思います。

最後になりますが、ご応募いただきました皆様をはじめ、この事業にご協力いただきました皆様方に感謝申し上げます。

平成三十一年三月

主 催 松 江 市

松江市教育委員会
八 雲 会

後 援 毎日新聞松江支局
B S S 山陰放送
小泉八雲記念館

目次

第33回 感想文 入賞者

★小学生の部

〈優秀賞〉

「こころの入り口」と琵琶

京都教育大学附属京都小中学校 四年 安藤 渚……………1

〈優良賞〉

灯し続けた稲むらの火

松江市立大庭小学校 四年 山田 優桔……………2

講評……………3

★中学生の部

〈優秀賞〉

『焼津にて』を読んで

学習院女子中等科（東京都） 二年 蓮尾 まりほ……………3

〈優良賞〉

あなたは「愛」のために死ねますか？

新宿区立新宿西戸山中学校 二年 池田 麻里子……………5

講評……………6

★高校生の部

〈優秀賞〉

鬼才な表現方法

水城高等学校（茨城県） 一年 篠原 凜久……………7

〈優良賞〉

少年の心

開星高等学校 二年 名和川 惇水……………8

講評……………10

★一般の部

〈優秀賞〉

松江の心象

京都府京都市 前川 幸士……………10

〈優良賞〉

約束とゆるし「雪女」を読んで

愛知県名古屋市 吉田 豊……………12

講評……………13

第30回 詩 入賞者

〈優秀賞〉

浜辺のふたり

沖縄県那覇市 あさとよしや……………15

〈優良賞〉

お雪の温もり

栃木県栃木市 洋子サン……………16

講評……………17

感

想

文

小学生の部

〈優秀賞〉

「こころの入り口」と琵琶

京都教育大学附属京都小中学校四年 安藤 渚

「日本一の琵琶法師」である芳一は、平家の亡れいによって、耳を失ってしまいます。

私はなぜお経をかきわすれたのが他の所ではなく耳だったのかが気になりました。また亡れいとは、芳一の上手な平家物語に感動したなら、芳一の耳をなぜとっていったのかも不思議に思いました。人に自分の気持ちを伝えたり、気持ちをうけとったりする時に、「目」や「耳」を使って、相手の顔や表しよう、声で交流しようとしています。そのように考えると、「目」のみえない芳一が「耳」まで失ってしまったということは、これから人との交流がうまくいかないのではないかとはじめは思いました。だけど、芳一は耳を失ったあとも「琵琶法師」として活やくします。天下一の琵琶法師だからこそ、「琵琶」が芳一の目や耳の代わりになって、気持ちを伝えたり、人の気持ちを受けとったりする「こころの入り口」なのだと思います。

だから、目や耳を失っても周りの世界とつながっていられるのだろうと思いました。

この「耳なし芳一」を聞いた、ラフカディオ・ハーン自身も、芳一と同じように、目をほとんど両目なくしているのだ、芳一の気持ちになれるからこの話をかきあげられたのだと思います。ハーンにとつての自分のかきあげた作品は、芳一にとつての「琵琶」であるのだと考えました。

耳にお経を書きわすれたことで、芳一はさらに琵琶法師として上達したのかもしれないし、平家の亡れいが芳一の耳をとっていったのも、もしかしたら、そのことを知っていたのかもしれない。

では、私にとつての「琵琶」は何でしょう。

私は目も耳もあるけれど、ふだん「見たり」「聞いたり」することは、ふつうのことすぎて、意識ししないでくらしています。

一方、芳一やハーンのように体の一部が不自由である人は、体に不自由がない人よりも、周りの人となつながら手段、「琵琶」を見つめる努力をしているように思えてきます。

「見たり」「聞いたり」できない人もいて、私はできてめぐまれている方なのに、見たり聞いたりできる力をむだにしている気がします。私は、これから琵琶を見つけていけるでしょうか。まずは、「見える」から、「見ようとする」、「聞こえる」「聞こうとする」というように、こころの入り口をひらいていようと思います。

〈優良賞〉

灯し続けたい稲むらの火

松江市立大庭小学校四年 山 田 優 桔

「いつもと違う雰囲気の本がある」そう思っ手にした本が稲むらの火でした。ろくろ首やむじなのように、題名を見ただけでも怖いのが小泉八雲の怪談です。しかし、「命を救った」と題名にあるこの本は、何か違うことを伝えようとしているのではないかと思いい、「何か」を探しながら読み始めました。

村人から親しまれている五兵衛が、地震の後に、一度も見たことのない海の様子を見て、津波がやってくる事に気がつきます。祭りの準備で全く異変に気がつかない村人に、高台から津波を知らせるために取り入れを待つ稲の束に火を放ちます。稲の火を消しに戻った村人でしたが、結果として高台に避難することになり命を救われます。

本を読み終えても「百の雷が一度に落ちたような音」というフレーズが頭からはなれませんでした。そして、海岸から一つの村を引きちぎるほどの災害である津波を知らない私にも、その恐ろしさが伝わり鳥肌が立ちました。また、津波そのものを知らない事への怖さも感じました。

稲むらに火を放った五兵衛の判断は、初めは全く理解することができませんでした。しかし、危険が迫る中で稲むらに放った火に、

これ以上の避難方法はないと思い、五兵衛の決断力のすごさを深く感じました。津波から避難するよう村人に知らせに行けば時間がかり、助かりません。中には津波を信じない人や海の様子を見に向かう人もいるかもしれませんが。鐘を鳴らし、知らせても、耳からの情報だけでは何のためにどこへ避難するのか分からず、村人がうろたえるだけです。しかし、天をこがすような大きな火が高台に見えれば、村人全員が消火するために急ぎます。結果として、五兵衛の本当に伝えたかった事は、避難した後に津波がおそってくる形で村人は知る事となります。

五兵衛が村人の命を救えたことには理由があります。なぜならば、津波を知っていれば正しい判断をし対応することができからです。

災害で怖いのは、知らなければ恐れるべきものが何か分からず対策がとれない事です。現代での「稲むらの火」にかわるものは「知識」だと思います。

稲むらの火は、村人を正しく避難させ役目を果たして消えました。が、防災の重要性を伝える稲むらの火は語りつがれ、灯し続けるべき火です。

八雲が伝えたかった「何か」は現代の防災のあり方だったのかもかもしれません。今は稲むらに火を放ち危険を知らせることはできませんが、防災について学び知識を得ることができれば五兵衛の様に、大事な「何か」を守ることができるかもしれないと強く思いました。

講評

今回の応募数は、前回よりも十点多く、十九点であった。応募されたとの感想文も、八雲の作品世界に浸り、そのおもしろさを小学生らしい素直な表現で述べられていて、好感がもてた。

優秀賞の「『こころの入りの口』と琵琶」は、芳一にとって琵琶とは、目や耳に代わる周りをつながる手段（入口）と捉え、その上で自分にとっての琵琶とは何か、と自問自答する作品である。八雲の作品を通して、自らの生き方を見つめ直す点が優れていた。

優良賞の「灯し続けたい稲むらの火」は、現代の稲村の火は知識であるという着眼点がすばらしい作品である。細かな描写まで読み込み、しっかりとした表現で綴られたところが優れていた。

（講評者 森脇 紀浩）

中学生の部

〈優秀賞〉

『焼津にて』を読んで

学習院女子中等科（東京都）二年 蓮 尾 まりほ

今年の春休みに島根旅行をした。特に印象に残っているのは、小泉八雲の旧居だ。なぜなら祖父母に、松江を訪れたらぜひ行くといいとすすめられていたのもあったし、なにしろ読書好きの私が、「文豪」といわれるすごい人の旧居を訪ねたのは生まれて初めてだったからだ。旧居に足を踏み入れた瞬間から、八雲の日本への愛が感じられた。静かな日本庭園が見渡せる明るい部屋に、ちょっと似合わないような背の高い、古い木製のイスと机。不思議な和洋折衷の組み合わせの居間は、それだからこそ現実味があり、まだ八雲が生きているような気がした。

松江ではなく、晩年の夏を毎年過ごしたという焼津。偶然にも、今、私の祖父母が住んでいる場所からそんなに遠くない。私は何か運命のようなものを感じて、「焼津にて」という作品を読まずにいられなくなった。

まず「焼津の海」という言葉で、私はオランダで過ごした夏を思い出した。オランダの海は北海に面していて、天気によっては少し黒っぽい色で荒々しい波がうねる。どこか焼津の海に似ているとこ

ろがあるのだ。八雲は焼津の海を見て、北海を思い出し、故郷を感じていたに違いない。

八雲は焼津のお盆と精霊流しにとでも興味を持っていたのに、その大事な夜を寝過ごしてしまい、慌てて海へ行く。遠ざかった精霊流しの小さな箱舟を間近で見たい、という衝動にかられて、着物も脱ぎ捨て、箱舟を追いかけるように泳いでいってしまうところはちよつと子供のようで意外で笑ってしまった。誰でもみんな『雪女』を読めば、真夏でも恐怖で寒くなつて鳥肌が立ち、『耳なし芳一』を読み始めれば、昼間でも自分の周りだけ静かな暗闇に変わっていくだろう。正確すぎる観察眼をもち、繊細な描写が得意で、物静かである八雲が「慌てる」というところに、人間味を感じたからだ。

八雲は泳ぎが大変上手だったというが、左目が失明していて、そのうえ波が安定しないお盆の頃の夜の海で、何を見て、感じたのだろう。目に代わつて聴力に全神経をとがらせなければならなかったと思うけれど、果たして何を聞いたのだろうか。

海に浮かぶ四角い箱舟の中に、海の上で亡くなった、八雲の父の魂を確かに見たと私は感じた。海から聞こえた悲しい音は、時代が時代で、父の愛情にあまりふれることも出来なかった、八雲の父の声だったのかもしれない。だから直感的に、これ以上、箱舟に近づいて泳いだり、この儀式を自分の手で、しかも自分の好奇心だけで決して止めてはいけない。あの世へ、箱舟に乗ってゆらゆらと帰っていく魂を、そつと見守るのが霊に対しての礼儀だと気づいたので

はないだろうか。

日本各地を訪れたという八雲がなぜ夏の焼津を好んだのか。その理由として、焼津には、自然を始めとして、昔から変わらない物が多いと感じ、執筆活動をする時、古き良き日本を想像しやすかったという事があるかもしれない。そして、真つ直ぐで正直な焼津の人々も大変気に入っていたようだから、(例えば、乙吉夫妻とふれ合うことによつて) 本当は自分もそんな人になりたかったのかもしれない。乙吉夫妻への安心感や信頼感も焼津を好むきっかけになったのだと思う。

私は今、中学二年生。これから自分がどうなっていくのか予想もつかない。確かなことは、今からもこれからもいつも私の周りには変化があるということ。そう思うと、ワクワク感なんかだけではなくて、少し怖いと思う時もある。

この物語を読むまで気がつかなかったけれど、人はいつの時代でも、変化と共に、大切なものを失いながら生きてきた。その証に、小さな島国の日本でさえ、八雲の生きた時代から百数年で、大切な自然を失い、代わりに世界に引けを取らないほどの近代化を遂げてしまった。しかし、変化もなければ今の私たちの快適で便利な生活もない。変わるものと変わらないものの線引きというのは難しいと思う。しかし、本当の自分が持つ気持ちや考え方は、そう簡単に変わてはいけないうと、八雲は私に教えてくれた気がする。

八雲の好きだった焼津の海――。私は思う。ずっと変わらないほしい、と。「時々立ち止まつて、自分の周りにある変わらないも

のを探してみなさい。自分の心に正直でありなさい。さてさて、ところで二千十八年の夏の焼津はどうなっているのだろうか。」本を読み終えた時、八雲が私に、そうささやいた気がした。

〈優良賞〉

あなたは「愛」のために死ねますか？

新宿区立新宿西戸山中学校二年 池 田 麻里子

授業で小泉八雲や怪談についてのビデオを観た。怪談には五つのテーマがあるという。それは、「愛」「信頼」「約束」「共感」「不条理」だ。怪談は恐怖だけではなく、この五つのうちの最低一つが入っていることを知り、驚いた。怪談は恐怖しかなくて、夢に必ず出てきて眠れなくなるものだと思っていた。毎日の朝読書時には必ず避けているジャンルの本だ。

私たちの班は「耳なし芳一」「雪女」「ムジナ」の中から「雪女」を選び、ポップを作ることになった。なぜなら、怪談では珍しく「愛」がテーマになっていると思ったからだ。ぬくぬくした家族愛しか知らない私は、夫婦愛が何なのかすら見当もつかない。妖怪が誰かを愛するなんて、想像もつかなくて単純に面白いのではないかと思い始めた。

何回も読み込むと、新たに不思議に思うところが出てきた。雪女

は茂作を殺し、巳之吉も殺すつもりでいたのに、約束を破られても巳之吉を殺さなかったことだ。

巳之吉殺しが未遂に終わったのは、本文中にもあるように、巳之吉が若く、かわいかったからだと思う。雪女の冷酷な心にも、罪悪感や何やら人間らしい感情が芽生えたのかもしれない。

雪女は再び巳之吉の前にお雪の姿で現れた。そのときは、巳之吉に近づいて今度こそ殺そうと画策し、機会をうかがっていただろう。

そのうちに、巳之吉の母にも気に入られるようになって、結婚。長く人間で暮らしていると小さな情のかけらが雪の結晶のように、積み重なっていった。雪女は母や巳之吉の優しさを感じていったのだと思う。また、十人もの子供の母となり、一人産み育てるたびに母性愛も高まり、人間に変わったように思えた。そして、孤独だった雪女は家族の温かみを知り、ほっこりと温かい心を持って、人間へと変化をとげた。

家族を大切に思うようになり、かけがえない存在だと気づいていく。自らの正体を隠して一緒に生きていくのは、罪悪感が大きすぎて辛い。でも、万が一でも、話してしまったら全てを失う。

心が変わっていくなかでは、激しい葛藤があっただろう。雪女は大好きな夫と子供たちを殺すことはできないと確信したと思う。

そして、ずっと来ないでほしいと願い続けてきた日がとうとう来てしまった。

夫を殺すより、自分が消えるという選択肢を選んだとき、私はと

でも驚いた。最初は巳之吉を殺そうと思っていたのに、最終的には夫を殺さず、自分を犠牲にしたからだ。「犠牲」もひとつの愛のカタチなのだろうか？

いくら巳之吉と結婚したといっても、温かい心が変わったからといっても、一番大切でかわいいのはやっぱ自分。それに、雪女は生きるために人間の生命をたくさん奪ってきたのだから。しかし、血と肉を分け、お腹を痛めて産んだ子供への愛に揺らぎはなかった。巳之吉の子供を愛する気持ちを信頼していて、子供たちの将来も考えていたからこそできた行動なのだと思う。

もし、約束を破った巳之吉が悪いと思い、殺してしまっていたら。果たしてその結末に本物の「愛」はあったのだろうか。

孤独で寂しい氷の世界で生きてきた雪女の様子は、日本にやって来るまで不遇な人生を送ってきた八雲とも重なる気がした。

八雲は遠い異国の地で生まれ、子供の頃に父母と別れ、単身アメリカに渡ったり、左目を失明したりなど数々の試練を乗り越えてきた。そのぶん、孤独な気持ちを強く感じていたのではないかと思う。縁あって来日し、結婚すると妻と子供と生活を送るようになり、初めて家庭の温かみを知った。寂しく育った者にとって、にぎやかな普通の家庭がどれほどまぶしく見えることだろう。家族愛というのは何気ない日常の一コマに感じるものなのかもしれない。

新宿にある八雲の終焉の地には八雲をしのぶように、オリブの木が植えられ、洋風の庭園を季節の花が鮮やかに彩っている。そこに立つと、やさしく吹く風が教えてくれる。雪女は存在しないけれ

ども、人間の中には様々な愛のカタチと意味があることを。

最初、雪女の話は「愛」というテーマだけで成り立っていると思っていたが、実際は違った。雪女が巳之吉によせた信頼、雪女と巳之吉の約束、読者が持つ雪女への共感、茂作だけを殺した不条理。これらが根底にあり、このテーマ全てが絡み合っていることを八雲は伝えたかったのだと思う。

愛は日常の中にあり、心ある人にしかわからないものだ。私は愛のために死ぬのだろうか。

講評

昨年とはほぼ同数の応募であった。八雲の作品を通して、日本人の心や生き方について、自分なりに感じたことや考えたことを素直に表現している作品が多かった。

優秀賞作品の「『焼津にて』を読んで」は、焼津で過ごした八雲の思いを想像し、八雲の人間味を伝える作品であった。自然と人との出会いから焼津を愛した八雲の人生観を通して、今の自分自身や現代社会の有り様について問いかける感性はすばらしいと感じた。

優良賞作品の「あなたは『愛』のために死ねますか？」は、主題を探りながら読み深めていくところが優れていた。人は「愛」だけでなく様々な感情が絡み合って生きていると、自分と八雲を重ね合わせて読み深めているところに好感が持てた。

(講評者 前田 真利)

高校生の部

〈優秀賞〉

鬼才な表現方法

水城高等学校（茨城県） 一年 篠原 凜久

私は、「小泉八雲」という人物を今まで知らなかった。しかし、今回、近代日本・世界文化に触れる機会があり、その時、偶然にも彼の作品に出逢うことになった。数ある小泉八雲の作品の中で、私は「葬られたる秘密」について考えてみることにした。なぜなら、「秘密」を題材にした作品は今までも数多く読んできたが、「葬られたる」という修飾表現に疑問を感じたからだ。秘密というものは他者に知られたくないものだから、自らが「葬った」なら理解できたが「葬られたる」というのは受け身の表現で秘密を持っている人物以外のものが何らかの理由で、秘密を消したということになる。いったいどれだけの秘密を隠していて、なにが理由で葬ったのかを知りたかった。

丹波の国の豪商の娘・お園は、たいそう綺麗で芸事の修行もされていた。そしてある時、一族の知人の商人のもとへ嫁入りする。二人の間には一人の男の子が生まれるが、結婚して四年後にはお園が病気で亡くなってしまふ。しかし、葬式を行った日に、お園の息子が、お園の部屋であった筆笥のそばに、幽霊となったお園が現れた

と言った。それからというもの、毎晩毎晩、お園は同じところに現れるようになった。どうして葬式をしたのにお園の魂は黄泉の国へ運ばれないのか。どうして幽霊となったお園は成仏しないのかは、誰にもわからなかった。この時代は、一般的に幽霊は現世に残ってしまった心残りにしがみついて出てくると言われている。そこで、親族はお園を成仏させるために、彼女の心残りであるかもしれないものをお寺に納めた。しかし、お園は、いつもと変わらずなく、筆笥のそばに現れたのである。様々なことをしても成仏することができないお園に、親族は相当困ったはずだ。お園本人も、気がかりが消えないことに苦しんだろう。一見、成仏させたいのにできない親族が苦しいように捉えられるが、お園も、気がかりな秘密がもし、親族にばれてしまつては、どうしようと不安になっていたはずだと読んでいた私は思った。

この序盤の段階で、お園の秘密がどれだけ彼女にとって重要で、どうしても気がかりでならないものであるかを私は理解した。私はお園の秘密が他者にばれないように、その秘密が隠れている部屋にいつも現れて、親族をその部屋に入れないようにする守り人や番人のイメージが想像できた。お園が守っている秘密がこの後、徐々に明かされていくことになる。

我慢の限界になった親族は、住職にお園を成仏してほしいという話を持ち掛ける。この住職はお園が毎度毎度現れる筆笥がある部屋に、彼女が成仏できない原因があると考えた。そしてその部屋で住職の前にお園が現れると。お園は住職に筆笥にある秘密を伝え、住

職はそれを見つけた。ここで、私が驚いたのは、お園が住職を信頼して伝えたことである。あれだけ、親族には隠し通したことをなぜ住職に伝えたのか。おそらく、仏教に通じた方には彼女の事情が理解してくれるのだと私は思う。この部分を読んでいた私は、ついに秘密が明るみになることに、興奮と物語が終わってしまふ悲しさの感情が交錯していた。

そして、お園が隠し続けた秘密の正体は「京都で修行していた時にもらった艶書」だった。艶書というのは、今でいう所のラブレターのようなものである。私は啞然である。なぜラブレターが秘密なのか。この一文を見て、私の頭の中のモヤモヤがさらに濃くなっていた。

そこで私は艶書の修飾表現の「京都で修行していた時にもらった」という所に着目した。修行していた時ということは、艶書を与えた相手は、今の旦那さんではない、物語に直接的に出てきてはいない未知の人物である。そこで私はどうして物語の中で、そこまで重要な意味を持たないこの人物の艶書をお園は隠したのかについて考えた。おそらく、今の家族を守るためではないかと思う。この艶書を亡くなるまで取っておいたということは、お園にもこの未知の人物に少なからず好意を寄せていたと考えられる。そして、もしこの艶書が旦那さんに知られてしまえば、きっと家族の間で対立が起きてしまう。それを防ぐために隠したのだ。

住職がこの艶書を口外せずに燃やすとお園に契り合い、お園は守り人としての役目を終え、無事に浄土へと去っていった。住職に

よって葬られた秘密と共に。

小泉八雲の「葬られたる秘密」を読み、お園の家族を守るために現れた優しさと秘密を隠し通す執念を感じることができた。そして、初めて見た時の疑念であった「葬られたる」という修飾の意味を理解することができた。この表現にはお園の視点で見られた住職の行動である。つまり、お園は約束をして消えたところがあるが、実際は住職が艶書・秘密をこの世から消すまで、お園は見届けていたのだと私見的な解釈であるがそう思う。

修飾表現だけで読者の興味をそらせることができる小泉八雲の文才をこれからも他の作品で楽しもうと思う。

〈優良賞〉

少年の心

開星高等学校二年 名和川 惇 水

夏休みに母方の故郷に帰るとき、私はいつも懐かしさと感じてしまう。そこで生まれ育ったわけでもないのに、家から見える風景や車で通った道などが、あたかも私の故郷がここであるかのように感じさせるから不思議だ。

「怪談四代記」の筆者である小泉凡もまた同じであったと思う。凡は自分の曾祖父にあたる小泉八雲にまつわる場所を旅し、また彼

や彼の家族を知る人物を訪ねて行った。この本は凡が旅先で出会った人や見たものの触れたものについて記されている。直接関係がある場所ではないけれど、自分につながっている人の故郷を訪ねるときに感じる懐かしさは、夏休みに過ごす祖母の家を懐かしむ気持ちと似ているところがあるなど最初に読んで思った。

凡は様々な場所を訪ねた。その中には小泉八雲あらため、ラフカディオ・ハーンの母ローザが父チャールズと出会ったギリシャのキシラ島も含まれる。ハーンはローザと四歳の時に別れて以来、二度と会うことができなかった。キシラ島はそんなハーンが生涯恋焦がれたローザにゆかりのある場所だ。その地を四代後の凡が訪ねているのだから面白い。彼がハーンの玄孫であるというと、地元の人たちは彼を歓迎した。

そんなハーンだったので、彼は母と別れた後、キャサリンという乳母に面倒を見てもらう。ハーンは幼いころキャサリンに妖精譚や怪談を聞く。ハーンがキャサリンから聞いた話は四代後の凡の家でも語り継がれているらしい。キャサリンの話はハーンの怪談の礎となったのではないだろうか。私も本の中に紹介されていた話を読んで、とくに「聴き耳」という話は、恐ろしくも面白いと感じた。ハーン家にはまだジェーンという修道女がいたこともあった。ハーンは彼女に「なぜ神様に気に入られなければならないの」と尋ねる。すると彼女は悲痛に歪んだ顔でハーンに創造主である神や天国のこと、そして地獄の恐ろしさについて説明する。半ば脅しのようなジェーンの教えに純粋なハーンは恐怖の念に駆られる。後にハー

ンはジェーンの亡霊を見たりするからともと超自然的な現象に敏感だったのかもしれないと凡も思ったのだ。

私はジェーンについてのエピソードに非常に共感した。というのも自分の母はフィリピン人で母方はキリスト教を信じていたので、同じように幼いころからジェーンが語ったような話を聞かされたのだ。悪いことをすると「地獄に落ちるわよ」と母に脅され、泣きながら謝っていたものだ。自分の生い立ちにハーンを重ねるといくつもの共通点が見つかる。純日本人ではないこと、そのくせ日本の文化などに日本人以上に関心があること、幼いころに、怖い話のせいで頭のとっぺんまで布団をかぶらないと怖くて寝付けなかったこと。様々なことにハーンに共感できる、だからキャサリンやジェーンの話もすんなり信じてしまえるのだと納得した。

そんな、誰よりも幽霊や妖精を信じる少年は大人になり、松江という地での妻になるセツと出会う。セツもまたお話し好きな女性であつたため、よく八雲に怪談話を語って聞かせたそうだ。八雲が怪談話に食いついたのもやはりキャサリンやジェーンの影響があつたのだろう。うらやましいことに八雲の周りにはそうやって八雲のために面白い話をしてくれる人が多くいた。そういう人たちの話があつて、小泉八雲の怪談は完成したのではないかと思う。

小泉八雲の怪談が完成したのは彼の心に少年ハーンの心があつたからだと思う。幽霊を怖いと思い、その存在を純粋に信じること。私が出会う大人の中で本当に幽霊の存在や超常現象について心の底から信じている人は、片手で数えて足りるくらいしかない。幽霊

の存在を信じろとは言わないし、実際私も半信半疑なのでひとのことは言えないのだが、はなから否定するのもなんだか悲しい。

私が知っている幽霊を信じる人の中には私の母も含まれる。幼いころ空腹に耐えきれなかった母は鶏の卵を食べようとしたことがあったらしいのだが、その時に向かいの窓で亡くなったはずの曾祖母が母を見ていたそう。母が幽霊を信じるきっかけとなったこの話を聞いた幼いころの私は、母の実家に行くのを嫌がっていた。ちなみに今でも母の実家に行くときと懐かしさを感じるとともに少し怖いなど感じてしまうことがある。半信半疑と言いつつ信じられているんじゃないかと自分でも思った。ハーンと同じような純粋な心があるのは嬉しいことだが厄介だなと思うこともある。目に見えないものの存在に怯えるのはばかばかしいことかもしれない。しかし、不思議なものを信じる心は人生を楽しく生きていくうえで必要なかもしれないとこの本を読んで思った。

講評

応募数は昨年と比べて六編増加し、とりわけ昨年応募が無かった松江から七編あったのは喜ばしい。いずれもしつかりと書いていたが、中には作品を介して自分の生き方に照らし合わせたり、日本人の心を見つめ直したりと非常に奥深いものもあった。

優秀作品は「葬られたる秘密」を読み、そのタイトルに秘められた意味を読み進めながら紐解いて行くプロセスと、本人の感想が巧みに表現されていた。八雲の文才を高く評価しつつ、作品に

対する愛着も伝わって来た。

優良賞作品は「怪談四代記」の筆者小泉凡の八雲にまつわる各地での触れ合いや、八雲が幼少の頃のエピソードと自分自身の生い立ちを重ね、共通点を見出し出した事による共感が素直に表現されており、大変好感が持てた。

(講評者 山根 貴司)

一般の部

〈優秀賞〉

松江の心象

京都府京都市 前川 幸士

NHK「ラジオ深夜便」のインタビュコーナー「明日へのことば」を書籍にまとめたものを読んだ。その中に、「曾祖父ラフカディオ・ハーンから受け継いだもの」として、小泉凡氏のインタビュ記事が印象に残った。氏は、松江を拠点に小泉八雲の研究、妖怪や怪談を活用した地域振興に取り組んでおられるということである。小泉八雲と最も関連の深い土地が松江であり、最も愛した土地でもあったと思われる。

ギリシャで誕生し、アイルランドで成長し、ヨーロッパ、米国、西インド諸島、カナダ、そして日本と、その生涯を旅に送った小泉

八雲であるが、その彼が最後に辿り着いたのが松江であると、漠然
と思いついていた。しかし、これは私の先人観に過ぎなかった。小
泉八雲が松江で生活したのは、一年余りの期間であった。しかも、
日本で最初に住み着いたのが松江であり、その後、熊本、神戸、東
京と日本国内を移動しており、終焉の地は東京であった。ただし、
小泉八雲の日本に関する創作の原点は松江であり、彼が描く日本の
風景・情景は、松江の表象であり、心象風景である。

先のインタビュー記事によると、小泉八雲が松江を気に入った理
由として、白く霞む神々の国に相応しい風景、土着の習俗や神道が
民俗学的興味に合っていたこと、牛乳が毎朝飲めること、松江の
人々の人情などが挙げられているが、やはり、伴侶となる小泉セツ
との出会いが、この地であったことが大きいはずである。彼女は、
妻であるとともに、小泉八雲の創作の中心である再話文学の創作の
パートナー、共同制作者でもある。彼女の語りによって、作品は書
かれており、その「語り部」としての資質が、小泉八雲の創作のポ
イントとなっている。彼女は、松江の出身であり、彼女の語りの内
容は、松江をベースとしたものである。

そして、“*The Chief city of the province of the Gods*”に端的に表現さ
れているように、小泉八雲の作品は、小泉八雲による松江の表象で
あり、心象風景なのである。それも、聴覚を中心として、五感で捉
えた松江の情景を、小泉八雲自身の中で換骨奪胎して、再構成し
て、表現したものが、その文学であると考えられる。従って、小泉
八雲が松江で暮らしたのが、一年余りであったとしても、松江の心

象風景は、その文学の中核をなしているのである。

これは、同じアイルランド、ダブリンの文学者で、“*Ulysses*”で
有名なジェイムズ・ジョイス (James Augustine Aloysius Joyce, 1882-
1941) についてもいえる。ジョイスは、大学卒業とともに故国を離
れ、終生にわたり典型的なコスモポリタンとして、イタリア、スイ
ス、フランスなどで暮らしたものの、遂に“*Dubliners*”であり、故
国アイルランドに執着し続けていた。彼の文学もまた、彼が描くこ
ころのダブリンの心象風景であり、情景である。

また、昨年のノーベル文学賞受賞者であるカズオ・イシグロは、
小泉八雲とは逆に、日本から英国に渡った日系英国人である。彼
の最初の長編、二作品、“*A Pale View of Hills*”と“*An Artist of the
Floating World*”は、日本を舞台にした作品である。五歳で日本を離
れ、今は日本語を忘れてしまった彼の描く日本は、記憶の中のぼん
やりとした日本であり、作家自身の日本の心象あるいは印象でしか
ない。日本人からみて違和感のある描写も少なくない。三作以降、
日本の印象、日本的なものは、彼の作品から消失したが、彼自身の
知名度が上がり、日本のメディア等への露出が多くなると同時に日
本との接点も増しているように感じられる。いずれ、日本への回帰
のようなものもみられるかも知れない。

島崎藤村の故郷が、木曾馬籠であることもまた有名である。しか
し、彼は九歳にして故郷を離れ、海外も含めて漂泊の生涯を送っ
た。封建的で前近代的な「家」の呪縛とそれを象徴するかのような
故郷から逃れようとしつつも、出自と血縁と思い出によって故郷に

繋がれていた。それが、「名も知らぬ遠き島より流れ寄る椰子の実」に「流離の憂ひ」を感じせしめた。そして、遂にはそれが『夜明け前』に結晶し、島崎藤村といえは馬籠といった印象を決定付けたのである。従って、『夜明け前』に描かれる風景は、島崎藤村の記憶の中の心象風景なのである。

話を小泉八雲に戻して、その作品に描かれる松江が心象であるならば、そこで怪談をはじめとする不思議な話が繰り広げられることは自然なことである。そこに登場する日本の妖怪が、アイルランドの妖精の形質を持っていても不自然ではない。明治の文明開化の時代、急速な近代化、西欧化によって失われていったもの、忘れられていったものが、小泉八雲の心象風景として、その作品に表現されていると考えられる。

〈優良賞〉

約束とゆるし

「雪女」を読んで

愛知県名古屋市長 吉田 豊

「約束を守る」ということがどれほどむづかしいことか。まして、はつきりと契約書をと리카わしたようなものでない場合には、本人は約束と自覚していないことだってある。「雪女」は、約束を守る

ことが命がけだった時代の話である。にもかかわらず、八雲の「雪女」の物語には、「ゆるし」がこめられている。

雪女は、吹雪の小屋の中に閉じ込められた二人の木樵を殺すためにあらわれた。二人を殺すという雪女の役割あるいは目的、それが自分の内なる約束（決意）だと、私は思う。雪女は、その約束を果たさなかった。若い巳之吉の命を奪うことはしなかったのである。巳之吉は生きることを選んだのである。これが、物語の中の第一のゆるしである。しかし、このゆるしは、条件付きのゆるしであった。すなわち、「今夜見たことを言ったら、そのときはおまえを殺してしまう」という約束である。

やがて、お雪があらわれ、巳之吉と夫婦となり、巳之吉の母親をも含めて互いに寄り添って生きていく。それは、雪女による約束の監視にとどまるものではない。やがて子供たちにも恵まれ、共に生きていくという約束が築かれていた、と私は思う。いわば、生と死の二つの約束が重なり合うような形になったのである。

子供がいるということがもたらす契約は、特別である。今日の日本社会は、「子は鎧」という時代ではなくなったが、それでも子供がいることで親の行動は大きな影響を受ける。親が自己を制約したり、思わぬ犠牲をはらったりすることがしばしばある。

そして、つい、巳之吉は、あの夜のことを雪に語ってしまう場面がくる。しかも、雪は「その女の話をしてくださいな」と、巳之吉に促すのである。彼には「あの出来事は夢だったのか」という気持ちがあり、明確な約束という自覚はなかったにちがいない。だから

ら、妻に問われるままに、あの夜の話を語ってしまったのである。約束を破ったなどと、最後の瞬間まで、巳之吉は気づきもしなかったにちがいない。

雪女は約束を破ったことを責めながらも、「そこに眠っている子供がなかったら、すぐにいま、あなたを殺したところです」と、子供の幸せを条件にして、巳之吉の約束違反をゆるしたのである。そして、この世から消えたのは雪女であった。巳之吉を殺さないことで、あの夜の約束あるいは決まり事を破ったのは、雪女であった。白い霧となった雪女が「震えながら」消えていく。彼女の震えは、自分を犠牲にすることで、巳之吉をゆるした証であり、子供たちを残していくことへの悲しみではなかっただろうか。

ここまで来た時に、私の中に一つの疑問がわき上がった。雪女は、独立した存在なのだろうか。雪女に命令する冬の魔王のようなものはいなかったのだろうか。魔王が雪女に、二人の木樵を殺すように命じたが、雪女は巳之吉を殺せなかった。それは、魔王の命令に反する命がけの行為だったのだ。だから、彼に口止めをした。しかし、巳之吉は、しゃべってしまった。それでも雪女は彼を殺せなかったために、魔王によって霧のように消されてしまったのである。雪女は、その愛と優しさゆえに、二度にわたって魔王から巳之吉を守ったのである。

よく知られた「雪女」を、六十代半ばを過ぎて読み直した時に、私に見えてきたもの。それは、約束を守ることは、命をけずるほどに重いということである。雪女の優しさは、その命をけずって「ゆ

るす」という行為にこめられたのである。幾重もの約束と幾つものゆるしの上を生きている人間への期待、すなわち子供を通じて未来を世話するという務めが、私たちに残されているのである。

講評

優秀賞の「松江の心象」は、小泉凡氏のインタビュー記事を取り上げる「変化球」でありつつ、小泉八雲と松江との関わりについて「伴侶となる小泉セツとの出会いが大きいはず」と本質を突く分析がなされている。ジェイムズ・ジョイスやカズオ・イシグロに話を広げながら、説得力をもって軽妙な文章で小泉八雲の心象風景が語られる点は、他の審査員の評価も高かった。

優良賞の「約束とゆるし」は「雪女」を題材とし、読みやすく分かりやすい文章で物語を貫く「ゆるす」というテーマを深く考察された。雪女がその愛と優しさゆえに命を削って巳之吉を守ったことには、幾重もの約束と幾つものゆるしの上を生きている人間への期待が込められている、という指摘は重い。

(講評者 岩崎 誠)

詩

〈優秀賞〉

浜辺のふたり

沖縄県那覇市 あさとよしや

エーゲ海に沈む夕陽は

宍道湖に沈む夕陽と同じくらい

とても美しく輝いておりました

義母のローザと私は夕方から散歩に出掛けて

やがて夜になりました

ギリシャのキシラ島に着いて二日目の夜です

一日目は市街を案内して頂きました

市がたつていたので立ち寄りました

菜の花のような素朴な花東が大変可愛らしく

尋ねてみると「センプリビーバ」という花で

この島のシンボルフラワーとのことでした

また蜂蜜を売る屋台を多く見かけました

なんでもキシラの蜂蜜は最高級とのこと

ヨーグルトに掛けていただく

大変美味しゅうございました

私はそれを夫のヘルンにも食べさせたかった

とても胸が痛くなりました

本当はヘルンが来たかったのです

それこそ飛んで来たかったのです

でも男のひとは死んでさえ身体が重いようで

女の私のように空を飛んで風に乗り

海を渡ることが出来ませんでした

なので私は単身で身ひとつで

ローザの元にやってまいりました

いつかヘルンはいいました

「私の温かい心、人や自然を愛する力は

全てお母さんから授かったものだ」

ヘルンがどれほどローザに

会いたがっていたか

私はその想いをローザに伝えにまいりました

ヘルンとローザが離れ離れになったのは

ヘルンがわずか四歳のときです

それ以来 再会はおろか

母の肖像画や写真を手に入れることも

出来ずにおりました

「全財産を叩いてでも母の写真がほしい」

とヘルンは常々嘆いていたのです

私の話をききながら

ローザは目を細めておりました

私は懐からカメラを取り出して

ローザに一枚撮って良いか尋ねました
ところが ローザは首を横に振ったのです

「ひとは死ぬと視野が狭くなっていけないね
どうしてこんな簡単なことを

いままで思い付かなかったのかしら！」
そうと決まれば 今度は私が

ローザをヘルンの元へ案内する番です
私たちは浜辺から飛び立ちました

写真を手に入れるどころか

まさか本物のお母さんに会えるなんて！

ヘルンの狂喜乱舞する姿が目に見えびます

私の胸も今から躍っています

〈優良賞〉

お雪の温ぬくもり

栃木県栃木市 洋子サン

もしかして巳之吉が
お雪の背中の冷たさに

うっと

気づくことがあったなら

そして 朝な夕な

お雪の冷たい背中を

黙って

さすり続けたなら

来る日も くるひも

お雪の冷たい背中を

そおっと そっと

さすり続けたなら

もしかして もしかして

お雪の冷たい背中に

ふっと

ナミダを流し

さすり続けたなら

いつの日か 巳之吉は

お雪の背中に

ほおっと

ほのかな温ぬくもりを

感じるものがあつたでしょう

きつと お雪が消えた後のち

すっぽりと家が

雪につつまれる度^{たび}

巳之吉と子どもたちは

お雪の温^{ぬく}もりに

ほおつと

つつまれたにちがいない

幾度^{たび}も いくたびも

ふかあく ふかく

ほおつと

講評

今回は、昨年度より応募数が増加したのに加え、ユニークな表現で楽しめる作品が多く寄せられた。

ハーンは、口承の躍動感を大切にしたいと言われるが、再話作品もまた、セツという生身の語り部を得てはじめて出来上がったものだった。優秀賞「浜辺のふたり」は、詩全体がセツの語り口で表現されている。セツの霊が「ヘルン」の母・ローザをたずね、「ヘルン」のもとへ母を連れて行くこうとする着想に胸を打たれた。文体も流麗である。優良賞「お雪の温^{ぬく}もり」は、お雪の背中の中の冷たさに夫・巳之吉は気づくことがあったか、と問う。それは、妻または女性の持つ硬質な痛みを想起させる。そこに感じる「温もり」こそが、お雪の消えた後、巳之吉と子どもたちを包んだに違いないという視点に驚くばかりである。

（講評者 升田 尚世・稲田 忠徳）

【審査員】

稲田 忠徳	岩崎 誠	日野 雅之
前田 真利	升田 尚世	森脇 紀浩
山根 貴司	渡部 寛子	

（五十音順）

表紙写真

松江時代の小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)

1891(明治24)年 小泉家蔵

平成30年度

**「小泉八雲をよむ」
感想文・詩 入賞作品集**

平成31年3月

編集・発行 松 江 市
松江市教育委員会
八 雲 会